



## タンチョウ博士のお話（第20回）

### 〇タンチョウがやってきた！

日本人なら誰もが知っている鳥「タンチョウ」。でも、ちょっと前、と言っても今（令和元年）から30年ほど前（平成元年頃）は、「北海道の鳥」に指定されているのに、道東にしかいない鳥だった。その少し前、つまり今から70年ほど前（昭和25年頃）は、せいぜい60羽くらいしかおらず、生存危うしと思われていた。さらにその30年ほど前（大正10年頃）は、絶滅を口にする人さえいた。

しかし、そのさらにさらに90年ほど前（天保元年頃、江戸時代）は、数は少なくなったものの、本州でもあちこちでタンチョウは目撃されていた。もちろん蝦夷地にもたくさんいて、長沼から千歳へかけての湿地帯はツルの一大生息地だった。残念ながら、長沼町を含むヒトの暮らしの拡大が、彼らをこの地から追い払ってしまった。

ところが、ツルを絶滅の淵に追い込んだ同じヒトという生き物が、ツルに餌を与えて絶滅から救い、現在1,800羽ほどの群れを保つまでにしたのである。それにより、手狭てせまになった道東から、2000年代には道北へ、2010年代からは道央へツルが溢れ出始めた。この事態に、タイミングを合わせるかのように、石狩川水系の洪水対策として、千歳川沿いに遊水地と称する湿地が6か所つくられた。そこで地域の人々が発想した「ツルよ来い！！」の呼び声が聞こえてもしたかのように、早速タンチョウがやってきた。

確かに、7、8年前にも1羽のタンチョウが長沼へ現われた。が、短い滞在にとどまった。まだ、ツルを長期に受け入れる施設がなかったからだ。しかし、遊水地が次第に形を整えると、新天地への移住志向を強めていたツルたちが、正規の開業を待てずに訪れはじめた。

ツルの移住志向、施設整備、これに地元住民の歓迎運動という3つの要素がタイミングよく揃い、ツルの長沼町定住化は進んでいる。特に昨年は春から秋へかけて、2羽が連続長期間遊水地をねぐらとし、しかも2か月近く飛べなくなる危険な換羽期かんうきを、遊水地の中だけで無事過ごした意義は大きい。

さらに、今年も春から同じ個体らしい2羽が遊水地にねぐらを取り、しっかり鳴き合いをしたことも、来春の繁殖を大いに期待させる。

確かに、1羽は3歳成鳥オスだが、もう1羽の2歳亜成鳥の性は遺伝子判定をしていない。しかし、鳴き合い行動（写真）から明らかにメスで、しかも、この行動は単なる友達以上の心理的結びつきが2羽にある証あかしでもある。

うまくいけば、来春、2羽の間で巣造りが始まるかもしれない。交通事故、電線衝突、アライグマなど天敵からの攻撃を乗り越え、無事ヒナを育てる姿を、私もぜひ見たいと心から願っている。

（文：正富宏之）



写真：舞鶴遊水地の中で鳴き合う2羽。  
左が成鳥オス、右が亜成鳥メス。  
（平成31年4月20日 撮影：正富宏之）

※今年度の「タンチョウ博士のお話」は6月号、10月号、2月号に掲載予定です。